聖公会生野センター機関誌

울림

ウル リム (響)

第5号

1997年11月20日発行

題字：康秀峰

『共に生きる』と言っても

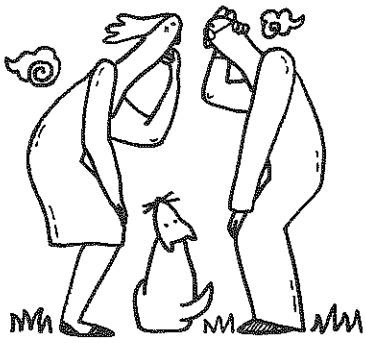
笹森　田鶴

日本聖公会で女性の按手実現について議論されるようになってから、様々な励ましやご意見、思いを伺う機会がありました。その中で、次のような言葉をよく聞きます。「男性も女性もないのです。女性だって男性と同じように出来るのです。召命を感じた方に司祭としての能力があれば問題はないのです。」この言葉を聞くたびに、女性の司祭按手に賛成し応援してくださることは頭では理解出来ても、何とも腑に落ちない思いを抱いていました。女性も男性の司祭と同じように務めを全うすることができるという励ましの背景には、女性でも男性と同じように考え、同じように振る舞うことが出来、同じように牧会が果たせることが出来れば、女性だって司祭になっても良い、という条件付きの賛成論が見え隠れするからです。他のこと（例えば異動や緊急時の対応、説教など）が一切男性と同じであれば、スカートを履いていようが、礼拝中にいつもより高い声が聞こえようが、かえって教会の雰囲気が和らぐ効果があるので良しとする賛成論です。しかしそれでは、今まで女性であるがゆえに経験した苦悩や嘆き、悲しみ、喜びや笑いが抹消されてしまう気が致します。今までの経験も含めて女性として生れたことを自分自身が受容できるからこそ、これからも女性である自分をありのままの存在で神さまの前に差し出すことが可能となるのです。もし、自分が女性であることをマイナスな事として受け止めなければならないとしたら、神さまがお造りになった存在を否定することになります。

次のような言葉も聞きます。「女性が司祭になれば、女性信徒のことがよく分かり、心から話せる司祭ができます。」本当にわたしたちは性別が同じというだけで心から信頼しうる関係をすぐ築けるのでしょうか。確かに女性にとって、男性よりも女性の方が話しやすいということはあります。しかし、それは既に破れている関係がそうさせるのであって、本来男性でも女性でも信頼関係は築けるはずです。また、同じ女性だというだけで、今までの歴史を無視して日本人の女性が在日韓国・朝鮮人の女性とすぐ連帯しうる関係になれると考えるならば、それは甚だ見当違いのことのようにも思います。

「共生」のビジョンをわたしたちの生活の中で具現化していくことは、決して生易しいものではありません。「共に生きる」とは、今まで実は共に生きてこなかったことを自らが認め、その関係を一端壊し、新しい関係を再構築していく事だからです。「共に生きる」時には、今までなかった混乱や騒々しさ、痛み、忍耐強い対話が必要となります。この共生のビジョンを持つ共同体のモデルを聖公会生野センターはわたしたちに示してくれているのではないでしょうか。

（ささもり　たづ
執事　東京教区聖パトリック教会牧師補）



（カット：久保麗子）

時のしるし

帰化と日本社会

松山　献

ペルマーレ平塚のロペス選手が日本に帰化し、「呂比須ワグナー」となった。W杯予選の報道で繰り返される「呂比須」という名前は、慣れないせいか妙に違和感がある。ロペスの帰化、特にこの名前について、日本人はどのように受けとめているのだろうか。なぜ完全な日本名に変えないのかと思う人、昔なら完全な日本名にしていただろうに、時代は変わったものだと受け取る人、どうしてわざわざ漢字を当てなければならないのかと疑問に思う人など、様々だろう。

9月28日付読売新聞朝刊の「編集手帳」は、明治初期に新たに名字をつけることとなった平民のケースを取り出して、「外国人が日本に帰化する場合は、新たに名字を作った明治の人々と同様、あれこれ考えることだろう」と語っている。どうしてあれこれ考えなければならないのだろうか。そのままの名前でいいはずである。名前を考える必要が生じるのは、日本式の名前が強要されるからだ。残念ながら、ここでは現行帰化制度が無批判に肯定され、在日の人々の苦悩が無視されている。

一方、10月1日付朝日新聞朝刊「天声人語」は、「国籍が変わることと、民族の意識が変わることが、一致するとは限らない。そもそも名字と名前は、『自分が何者であるのか』という、個人のよりどころと深く結びついている」と、現行帰化制度への批判と姓名の本質を語っている。

日本人は海外に行くと、自分の姓名を逆さまにしてきた。誰しも英会話の勉強でまず「マイネームイズ△△○○」と逆さに呼んだ経験があるだろう。さも格好いいかのように。今でこそ、パスポートは姓名の順に記載しているが、昔は逆さまだった。自分の姓名を逆さにして何も疑問を感じない日本人だから、他国の人の名前を変えてしまっても平気なのだろう。それほどに日本人は名前に関して無頓着であり、それは日本人としてのアイデンティティが希薄だということを意味する。

私は最近、ハワイとシンガポールを訪れたが、いずれも多民族社会という点で共通していた。多民族に至る歴史的経緯や現実の問題点は別にして、ハワイでは、先住ハワイアン、日系、韓国・朝鮮系、中国系、フィリピン系などがアメリカ人として共存しているし、シンガポールでは中国系、マレー系、インド系などがシンガポリアンとして共存している。真の共生社会といえるかどうかは疑問点もあるが、少なくとも今の日本におけるような問題はクリアされていて、どうして日本ではこうならないのだろうと残念に思った。

大多数の日本人は、日本国籍＝日本人（国籍＝民族）と思いこんでいるから、帰化者に対する「もうあなたも日本人になったのだから…」という表現に象徴されるような同化の発想が強い。国籍が日本であっても、民族としては○○人だということが、感覚的に理解できないのが大方の日本人だ。単一民族思想が植えつけられた結果だろう。○○系日本人という発想が出てこないのだ。しかし、日本における在日韓国・朝鮮人の国籍問題は、他国のいわゆる多民族・多文化社会と同列に考えるわけにはいかない。

なぜなら、今の帰化制度は、法的には「国籍の取得」ということだが、実質は日本人にならせてやるという恩恵的発想で実施されており、かつての皇民化政策と何ら変わらないからだ。「帰化」とは元々「天皇への帰依」という意味だ。法務省の窓口でのやりとりやかつての役人の発言が証明しているように、まさにその文字通りの現実がある。

さらに、必ずふまえておかなければならないことだが、日本人には、在日韓国・朝鮮人の存在自体に対して責任があるからだ。したがって、帰化をめぐっての在日の人たちの様々な苦悩に対しても、日本人には大きな責任がある。日本人が作り出した、ある意味で取り返しのつかなくなってしまった現状の中で、在日の人たちがどのような生き方を選ぶのか、日本人には何ら口を差しはさむ余地はない。とにかく、今を生きる日本人に課せられた責務は、在日形成への責任をふまえた上で、帰化制度そのものを改善し、現在踏みにじられている基本的人権をきちんと保障し、民族的アイデンティティを持ち続けられる社会（つまり在日の人たちが、外国籍であろうと日本籍であろうと、何の差別も受けることなく、自らの本名で生きることができ、慣習や生活様式もありのままに保つことができる社会）を築くことであると思う。

（まつやま・けん　京都聖ステパノ教会信徒　大阪教区在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会協力委員）

アトリエＩＫ　５周年を迎えて

岡本　雅由

我々人間は誕生に際し祝福や期待を一杯受けたに違いない。しかし人生の過程で「産んで欲しくなかった、勝手に産みやがって」と悪態をつく。本当は意志があって自らの意志で人間として誕生して来たはず。我々は苦しいときや悲しいとき自分の存在を否定しようとしたり又自分の存在を拒否しようとする、人間として命を貰った喜びを忘れているのである。

今、自分の置かれている状況に惑わされて本来の心を見失っているに違いない。ふと立ち止まり自分自身を見つめてみれば気づく事が多いはずである。

精神の病気、障害については一般の人は殆ど知識がない為に報道で得た情報を鵜呑みにしている事が多く、最近まで精神とつくと拒否反応を露骨に顔に出す人が多かった。家族ですら、人に知られると家の恥とか、恥ずかしいとか、肩身が狭いとか、又、兄弟姉妹の縁談に差し支えると言って、家に閉じ込め外に出さないようにしていた。入院させたら退院をなかなかさせない、等々精神的、肉体的に偏見、差別、虐待を科せられていた。

今では、身近な人たち（家族）は、精神病は病気である事を大部認識して来た。一方、当事者は入退院を繰り返した人も、入院経験の無い人も自分の病気を真っ正面から立ち向かう姿勢を見せ始めて来ているようである。

地域で生活する上でやはり当事者自身の心の問題が大きく、スムーズに生活できないのが現状である。心の問題とは、自分が精神病である事への引け目、後ろめたさなど心の中に複雑に折り重なっている。自分の気持ちに嘘を付き、ごまかし、仕事、アルバイトに行く時でも病気のため、集中力持久力の減退、外的刺激（人の目や言葉）に対し過敏に反応してしまい、精神的に不安定になる。どうしたら精神障害者が地域で生活を送れるのか、生きて行けるのか、まずは病気の正しい知識を人々に知ってもらう事であると思っている。特別な病気ではなくありふれた病気なんだと知ってもらう事ではないか。又、当事者は自分は特別な病気ではなく人々に差別や偏見を受けるゆわれはない事をもう一度再確認してもらいたいし、もっと自分の病気を理解してもらいたい。地域で暮らす楽しさを身を持って感じてほしい。

私は精神障害者小規模作業所の職員ですが、何をするところかと、よく聞かれます。地域の人達にはまだまだ知られていないのです。

何をする所かと言うと、地域で暮らしている人たちが行く所が無く家でひっそりと過ごすといった不健全な生活から抜け出てもらう為に居場所を提供しているところです。単に居場所といっても当事者でない人たちは、何をしている所？何の目的で集まっているの、とよく言われるが、第一に病気で入院していた人には、入院生活と地域での生活とではリズムが違っていてなかなか自分のリズムが作れません。作業所を利用する事でリズムを付け体力を付け、地域で胸を張って病気と仲良く暮らして行ける事を目指しているが、地域の人たちの協力無しではとうてい成り立たちません。

この度、当作業所は人員増加に伴い、広い借家に移転しました。今まで５年近くお世話になっていた家主さんは初めから精神障害者に理解があった訳では無く、日を増す毎に理解を深めて貰えたと感じています。今回、借りる事になった家主さんも理解しようとして前の場所に何度か足を運んで下さった事で契約し借りる事が出来たと思っています。

精神障害者が地域で生きていく難しさは誰よりも病気に対し真正面から向合っている当事者自身が一番よく知っていると思うし、気付いているのではないだろうか。

作業所で職員として勤めている者は、如何なる時でも精神障害者と地域のパイプ役にならねば地域の人達に精神病を又、精神障害者を理解して貰えないと心より感じている。

最後に、“精神病はありふれた病気である。”

（おかもと　まさよし
精神障害者小規模作業所アトリエＩＫ職員）

地域社会で共生社会を考える

【成長する中で】

私は在日韓国人２世ですが、３歳の時から日本基督教団聖和教会に創立の時から行っています。私は教会に繋がっていく中で地域活動に関わり、聖和社会館・保育園という福祉事業を担うことになりました。教会の関係で言うと、現在は日本基督教団の教育委員会の書記をしています。

私は1947年生まれで、今年で50歳です。大阪・生野という地域で生きていき、現実の地域社会がまだまだ大きな課題があると思うと複雑な思いにかられます。在日韓国人の２世ですから育つ中で差別をうけてきました。繰り返し差別されていくと、日々の生活、学校での生活、成長していく過程での友人との関係、生活の中で人間性が歪められていきます。一番のことは日本社会に住んで、日本人との関係で自分の気持ちが歪められていくということが私にとって大きなことでした。

保育所時代の話ですが、友達と遊んでいると、友達が私に石を投げてきました。何かけんかでもしたのでしょうが、その石が頭にあたりこぶができてしまったのですが、そのとき友達が「朝鮮人！」と言いました。言われた時、朝鮮人であることが何なのかわかりませんでした。しかし、そのときに「朝鮮人！」と言われ石を投げられたことは、心の中で深く衝撃を受けました。もう45年以上も前のことですが、鮮明に覚えています。自分が「朝鮮人！」と言われ、そこから朝鮮人であることの自覚ができてきました。成長していく中で学校での事柄が「朝鮮人」と言われたことと重なってきました。そういうことが、度々おこってくると朝鮮人とは何か悪いことなのかと思い、自分が朝鮮人であるということを隠そうと自然に思うようになるのです。

小学校では、朝鮮人の子どもはほとんど日本名を名乗っていました。戦前に強制的に日本名にしなければならず、戦後も日本名を名乗らなければ生きていけない状況におかれていたわけです。ところが、出席番号は日本人の子どもが先でそのあとから朝鮮人の子どもの番号が始まりました。いくら日本名を使い日本人のようにしても、学校という教育現場で「あなたたちは日本人とは違う」と言われたのです。学校は私にとっては、朝鮮人であること、差別されることを実感する場となっていきました。

家庭では、父は「おまえは朝鮮人なのだから朝鮮人としての自覚をしっかりもって生きなあかん」と言うのですが、生活の中で通名を使い朝鮮人としての誇りを持つような環境が微塵もない、そんな中で育って人間性が歪まないはずがありません。

中学で進路について担任が「君は朝鮮人やから行く学校ないで。あるとしても限られている」と言うのです。進路そのものが朝鮮人には厳しく、自分の中に大きなしこりを残しました。

工業高校に進みました。その学校である日本人の教師と出会ったのが人生の大きな転機になりました。私は高校でまた通名で通うつもりでした。ところが担任が「君は朝鮮人なのだから朝鮮の名前を使え」と言ったのです。今まで散々朝鮮人であることでいじめられ、日本人のふりをしてたのに本名を名乗れと言われてもたいへんなことだったのです。半年後、根負けして「金」という名を使うことにしました。ある時学校でお金がなくなり、何人かが呼ばれました。担当の教師が「金、おまえがとったんやろ」「なんてこと言うんですか」「朝鮮人は泥棒するからな」…。小、中、高と教育現場で平気で児童、生徒の心をかきむしっていく。しばらくしてお金が出てきて疑いははれたのですが、つらかったものです。

高２の冬、何人かの友人と郵便局のアルバイトに行くことになりました。郵便局に行くと係の人が、「郵便局では朝鮮人に仕事をしてもらうわけにはいかない」と言い、バイトができなくなってしまいました。一緒に行った友人の中には日本名を名乗っている朝鮮人の友人もいたのですが、本名で働こうとした私だけがだめでした。本当のことを出すとだめということがつらかったのですが、そういうことは30数年前の出来事でなく今でもあります。私が金徳煥という名をあたりまえに使うようになったのは生野地域活動協議会で活動するようになってからです。

【地域活動に携わるようになり】

1983年に「生野民族文化祭」が始まりました。青年や子どもたちを中心に民族衣装を着て、楽器を打ちならしながら地域をねり歩いたり、小・中学校を会場に韓国・朝鮮の文化に親しむお祭りがあります。生野民族文化祭の終わりのパレードに120人ほどが集まりました。私ば指揮をしたのですが、民族衣装を着て、みんなと一緒に行こうとしました。ところが体がついていかないのです。一歩が踏み出せない。それは私が育った地域で初めて民族衣装を着る、隣近所の人たちにおおっぴらに自分は朝鮮人なんだとなんとなくふるまえない。怖さが出てしまう、しかし自然と押し出されて町にでました。

1977年から聖和教会でオモニ・ハッキョをすることになりました。オモニはお母さん、ハッキョは学校、いわゆる識字学校なのですが、在日一世のための日本語の学校を始めようということになりました。当時は牧師の住居が別の所にあり、「在日のことをするのだから、韓国人で家も近いのだから管理人をしなさい。」と、週に二回、鍵の開け閉めをしました。だからオモニ・ハッキョに積極的に関わったのではありませんでした。２人の在日一世で始まり２年後には80人になりボランティアの先生も足りなくなり、そんな中で、礼拝堂の横の部屋に一時間半ぼーっと過ごしている人がいる。ひまなら教師を手伝ってほしいと言われ私も関わるようになったのです。それが私の人生を180度変えてしまいました。70歳、80歳のおばあさんが熱心に勉強していて、「この年になって字、読まれへんの恥ずかしい。」植民地時代に日本に来て働き続けてようやく、勉強しに来たのですが、人生の様を聞いていると私のほうが恥ずかしくなってしまう、それが地域活動の最初の関わりでした。在日韓国キリスト教会館（KCC）の李清一氏から生野地域活動協議会の主事として働かないかと誘われ、ごく自然に自分の導かれた道なのだと思えました。主事を３年して聖和社会館へ、そういう活動を重ね、地域社会がよくみえて来ました。あたりまえですが、地域には日本人も在日もたくさん住んでいます。現在、生野の人口は15万人で、そのうち４万人が在日です。在日は住んでいるけれど地域から疎外されていることがわかりました。生野の在日朝鮮人は今、４世５世が生まれ育っています。

以前は、差別されてきた一人と思って住んでいましたが、今は地域社会に住む一人だと思っています。自分も地域を担っていく責任がある。以前は差別をする日本人は嫌いと感じていました。最近、若い人が地域活動に関わっています。地域は日本人のもので、朝鮮人はおこぼれのように住んでいるという関係で続いていくはずがありません。ましてや、地域作りの課題に朝鮮人だから日本人だからということはありません。以前の私でしたら、日本人のお年寄りは面倒みたくない、偏狭な体験の中でそう思わざるをえなかったのですが、最近２人の老人をみていて、ひとりは日本人、ひとりは朝鮮人で、人間としてその人たちをみます。私たちが民族や過ぎ去ったこと、体験だけに固執していたらお互いに心を開いて共通の課題を担うことはできません。

【おわりに……キリスト教の可能性】

生野地域は大きな可能性と、人が豊かに生きれられる街になってきています。特にキリスト教の地域活動が大きな役割を担っています。KCC、聖和社会館、聖公会生野センターとキリスト教のセンターがあります。カトリック教会は障害者、障害児の活動を行い、たくさんの障害者の作業所ができました。在日と日本人が共生をめざした取り組みをしています。日本全国をみても、教会が中心になって地域活動をさかんにやっているのは生野くらいではと思います。人を人として認めあい生きていく豊かな現場ができてきています。

生野で私たちが集まると話題になることの一つに今、生野で一番元気なのは聖公会生野センターではないかということです。聖公会生野センターは今、新たなものを生みだしているところです。そういうキリスト教を中心とした活動が地域を活性化させる、単なる活性化でなく様々な思いをもった在日の人たちが解放され、障害者があたりまえのように外に出ていって暮らしていく街になると思います。

最後に生野にとって今一番元気な聖公会生野センターを支えてください。人が日常の生活中でお互いにつながり生きていく街づくり、キリスト教の教派を越えて、行政からでなく自分たちの手によって大きな力になっていくのです（文責：編集部）。

（きむ　とくふぁん　聖和共働福祉会常務理事）

私の気づいた韓国

今西　豊行

早いもので、ソウルに来て６ヶ月目の生活である。この間、日本にあって韓国にないものを思いつくままに並べると、アジの開き、地下鉄・市内バスの時刻表、猫、テレビドラマの中での殺人およびポルノシーン、勘定時の割り勘、朱肉つきのはんこ入れ……と続く。

まず、韓国人は犬肉をたべる割には、飼い犬をよく見かけるが、反対に猫は極めて少ない。どうしてかと訊いてみたことがある。「韓国人は猫よりも犬が好きだから。」と言い、続いて「猫は主人を裏切る動物。犬は忠実というイメージを持っている。」と、答えてくれた。韓国犬の中で、最も勇敢として知られる珍島犬が有名だが、別の友達に同じことを尋ねてみると、韓国の昔話で大変納得のいく話をしてくれた。

――昔々あるところに犬と猫を飼っている王様がいました。ある日宮殿に泥棒が入り、王様がすごく大切にしていた宝石を盗まれてしまい、犬と猫が宝石を捜しに出掛けました。２匹は、川の対岸に宝石があるのに気付き、犬が猫を背に乗せて川を無事に渡りきるやいなや猫が宝石を拾って王様の前に「私が拾ってきました」と差し出しました。

王様は大変喜んだ後に「おまえは何をやっていたんだ」と犬に向かっておこりました。でも犬は全く弁解しませんでした。それ以来、猫は何不自由なく、今まで以上にかわいがられ、一方犬は床の下で生活させられるようになりました。――

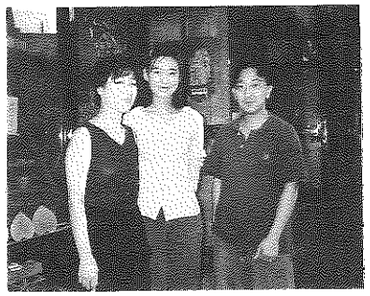
結局、韓国人の中で「猫はずるがしこくて、裏でコソコソと何をやっているのかわからない。犬は正直なうえに、真面目、そしてひどい扱いをうけても文句を言わない動物だ。」と感じているのでしょう。

ところで、韓国で見たことのないもので、もうひとつ詳しく書きたいものが、地下鉄の時刻表である。それらしきものと言えば、始発と終電の時刻を書いたものだけ。時刻表のあるなしに関係するのか分からないが、地下鉄の乗り降りは凄絶である。

まず、電車が駅に着くと人はパッとドアの両サイドにわかれる。大阪以上に「整列乗車」が守られていない。降車する人なんて一切かまわずどんどん中へ入っていく。中には端から乗らずドアのド真ん中で仁王立ちをし、ドアが開いた瞬間突入する人もいる。乗り換えの多い駅でこんなことをされると、怒るのを通り越し、あきれるのをまだ通り越し、その大胆な行動に拍手を送りたい気持ちになる。通学途中乗り換える市庁駅で一度、真正面から強くぶつかってこられ、私が「アッポー（痛い！）」と大声で叫んでも謝りもせず、あるアジュマ（おばさん）は中へ入っていった。「整列乗車キャンペーン」をして欲しいとつくづく思う。人とぶつかっても謝らない韓国人を見ている我々外国人にとってソウルの印象は悪いのではないか？こういった「我先に」というのは市バスでも同じである。

これについても友達に聞いてみたことがある。「韓国は、日本の植民地支配から解放されたのもつかの間の朝鮮戦争。そして繰り返された独裁政治とクーデター。力ある者の支配下で明日はどうなるか全然わからない日が続いたために、順番なんて守っていたら生き延びてはいけない歴史があったから」とのこと。

生き延びることは、どの国でも同じことであろう。でもこの国にはそれ以上の切実さが伴う。だからこの国の「忠犬好き」という言葉にはどことなく哀愁がただよっているようだ。



（いまにし　とよゆき　現在ソウル留学中）

ちょっとひと息①

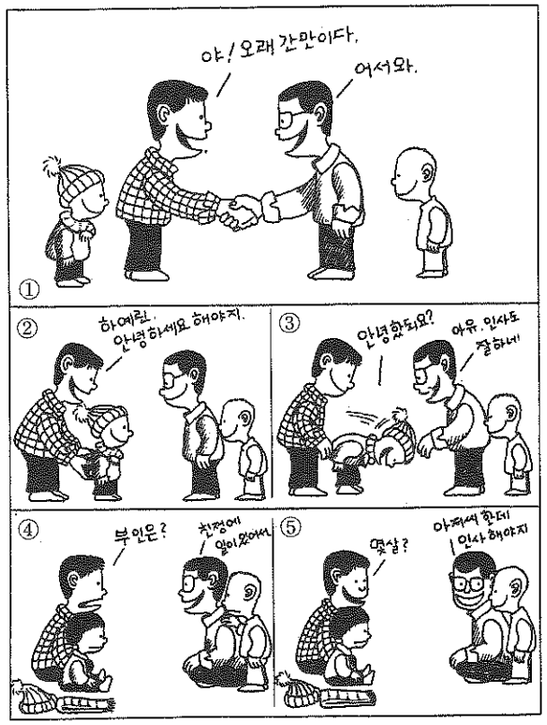
탐관의 밑은 안반 같고 염관의 밑은 손곳 같다

貪官の下は餅つき板のようであり、廉官（清い官吏のこと）の下は錐（きり）のようである。
欲深い官吏は財産を儲けて肥えて、清らかな官吏は清貧で青白い体をしているという意味。

連載マンガ⑤

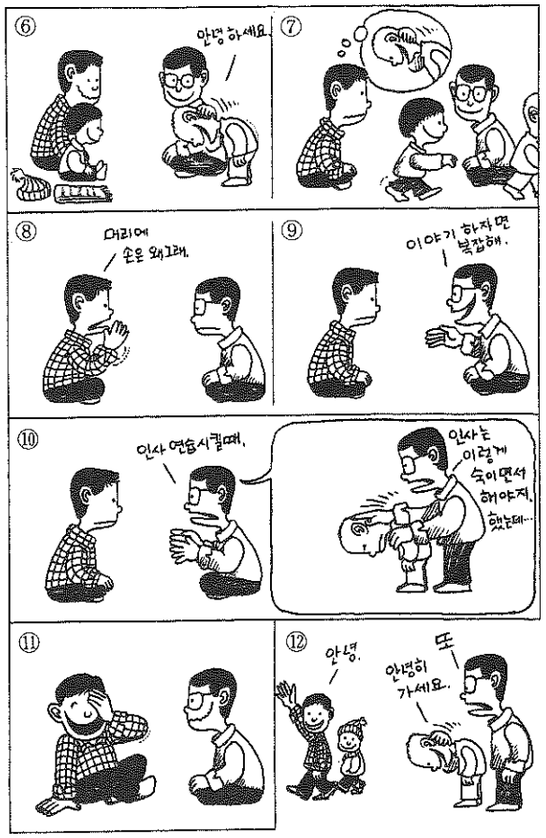
안녕하세요

（こんにちは）



①やあ、久しぶりだねえ。
　いらっしゃい。
②ハエリン、こんにちわしなさい
③コンニチワ
　まあ、あいさつもじょうずだねえ
④奥さんは？
　実家で少し用があって
⑤おじさんにあいさつしなさい。
　いくつ？

⑥こんにちは
⑧何で頭に手をこんな風に？
⑨話せばややこしいんだけど…
⑩あいさつの練習をさせたとき
　あいさつはこんな風に頭を下げてしないと、やったので、
⑫バイバイ。
　さようなら。
　又…



作者：崔正鉉（ちぇ・じょんひょん）
パンチョギ（もう一方）の愛称で親しまれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。そのユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995年第１回平等夫婦賞受賞。

大阪講師屋日記

鄭　雅　英

東京方面を離れて大阪で生活を始め、そろそろ丸３年が過ぎようとしている。こう言うと大方の人々から「大阪へはお仕事で？」などと聞かれるのだが、実際は結婚する時、職の無かった私が、しっかりとした稼ぎ口を持っていたヨメサンとなる人物のところに転がり込んだだけの話である。

東京にいた時分はキリスト教系の私立学校で社会科の非常勤講師をしており、何にでも顔を突っ込みたがる腰軽な性格が幸いして、中学・高校の社会科系統のほとんどの科目を回してもらっていた。中学の地理、歴史、公民、高校の日本史、世界史、倫理、政経、現代社会―――と言う具合に。それだけ担当時間が増え、収入も増えるわけだ。教科書の中身や受験問題とは極力縁がなさそうな話をするのが得意で、おかげで自分でも随分と雑学に長じるようになった。大卒直後で日本のアジア侵略や天皇制の話になると、つい力んでしまい、学校には保護者からの「抗議」(たいてい匿名)が何度も舞い込んだらしい。今でも在日朝鮮人が日本の天皇制を云々するなど、とんでもないことなのである。「抗議」の声に毅然と対処して下さった牧師の校長先生には、ずっと感謝の念が尽きない。

丸十年続けた講師を廃業したのは、出し抜けに中国にある朝鮮族自治州での生活を思い立ち、留学の手続きをしたからである。中国で貯金をあらかた使い果たし、ヨメサンを頼りに我が在日朝鮮人のメッカ大阪にやって来たのはいいが、今さら焼き肉屋の主人になったりキムチ屋さんを始めたりというわけにもゆかず、結局いろいろお願いして回って講師業の再開と相成った。

今年の受け持ちは大学４校に高校２校と、お陰様で結構忙しい。とりわけ今年で２年目の生野のプール学院「ハングル」の授業は、なにも生まれて初めて女子校に足を踏み入れたからというばかりでなく、初めて創設された授業の初代担当者という責任感から、私にしてはかなり緊張して取り組んでいる。生存権問題というべき大学非常勤講師の恐るべき薄給であるとか、今どきの大学一般教養授業の惨状(学生の私語！私語！私語！）はともかくとして、あちらこちらでいろいろな人々と出会うことができるという意味では実に刺激に満ちた毎日である。

しかし何といっても最も刺激に満ちていたのは、今年の７月にわずか３週間だけ受け持った公立夜間中学講師の仕事である。夜間中学といっても、東大阪にあるその学校の生徒は９割方在日朝鮮人のハルモニ（おばあさん）で、様々な理由で勉強できなかった彼女たちがひらがなやハングル、足し算や引き算などを習いに来るのだ。平均年齢60歳代後半、最高齢は80歳を超える。驚くべきは授業中の生徒の熱気で、教員の一言一言に熱いまなざしで応えて下さる。耳が少し遠かったり忘れっぽくなったりなどは、とにかく一つことでも余分に知ろうとする熱意の前に、ハンディにもならない。こちらのつまらぬ冗談話にもしっかりつきあって下さるが、すかさず「先生早く次の漢字に進みましょ」と催促がでる。

ハルモニたちが学ぶ姿を、何とか一度大学生や高校生に見せたいものだと思う。それにしても、彼女らの姿が特別なものに見えるほど今の教育の在り方はどっか間違ごうとるんとちゃうか―――、などとまだ怪しげな大阪弁で独り言をつぶやきつつ、今日も私はあちらの学校、こちらの学校へと飛び回っている。

（ちょん　あよん　大学講師等）

（カット：久保麗子）

ちょっとひと息②

코 떠어 주머니에 넣다

鼻がはずれて袋に入る。

どんな失敗をしても、無事であったときに使う言葉。

大阪考③

高二三

パクのイヤギ（おはなし）

（金文善著　1992年、新幹社刊）

定価：本体価格1500

もう５年前のことである。『パクのイヤギ（おはなし）』という本を出した。今ではあまり注文もこなくなってしまった本だが、結構力を入れて作った愛着のある本である。

この本の舞台はもちろん大阪（主人公パクはしばらく和歌山県を転々とするが、それを除くと、朝鮮忠清道、それ以上詳しいことは本人にもわからない）生まれのパクが、もの心をつけた最初の風景が次のように書かれてある。

「ぼくが日本で最初に住みついたのは大阪市の真ん中を流れる淀川の支流、尻無川近くの港区市岡三丁目だった。そこで伯母さん夫婦は飯場を始めたんだ」

「伯母さんはおかにかりている飯場の家賃が高いので、少しでも貯金をしようと、尻無川につながれていた船を安く買いとってこれを飯場に改造して、ここに引っ越したんだ（船飯場という）」

「飯場というのは、沖合の本船や川筋のはしけで仕事をする労働者をねとまりさせ、ごはんをたべさせて、いくらかの利益をあげる宿屋のようなものなんだ。」

「今は水上生活者ということばはなくなっているけれど、そのころは沖合の本船から積み荷をあげおろしして川筋をゆききする運搬船やはしけ船のひとたちには、その船が自分の家なんだ。子供はそこで生まれ、そこで育ち、そこから小学校にもかようんだ」

およそ1930年頃、「大阪は水の都、けむりの都」と呼ばれ、工場へ運ばれる材料、出来上がった製品などすべての品物は、大阪中たてよこに走っている水路を利用して運搬されている時代だった。映画『泥の河』の世界がそれと同様にまさに子どもの視点で描かれているのだが、『泥の河』はその映画を知らない人がいないほど観られ、『パクのイヤギ』は出版当初も今も、その存在すらほとんど知られていない。このまま消えてしまうのだろうか……。

大阪といえば、生野区猪飼野は朝鮮人が卑屈にならず堂々と生きているイメージがあって、そのしたたかさ、がんばり、たくましさが喝采を浴びる傾向がある。しかし、ひっそりと、底辺の貧乏人としての生を営む絵は朝鮮人には似合わないのだろうか。日本人からの蔑視や差別を受けながらも、それをするり、するりとかわして生き抜くような生き方は、人々には語り継がれないのだろうか。

パクが家出して、風呂屋の下足番していた時、かつての親友ケンちゃんがやってくる。だが、互いに声をかけられず、パクは恥ずかしくて、翌日にはそこを辞める。そんな心情は現代にも通ずるはずである。

いまではなくなってしまった職業だったり、生活の習慣だったり、あるいは町並みであったり、そして心象風景であったり、そんな消えてしまった大阪の1930年代、なんとも言えずいとおしいではないか。心に残る貧しい人々の暮らしぶりに胸を熱くせざるをえない。大人が読むメルヘンとして長く読まれ継がれて欲しいと心から思っている。

終わりに蛇足。パクが和歌山に行ったおり、おばあちゃんが着物をちょんとつまんでたくし上げ、足を少し開いて立ち小便をするシーンがある。当時の日本の田舎では、ボーヴォワールの言う“第二の性”はまだ作られていなかったんだ、となんとなくホッとした気分になったことを覚えている。

（こ　いーさむ　新幹社代表）

パクのイヤギ（おはなし）は
聖公会生野センターでも取り扱っています

語りだした人たち

呉　光　現

＜はじめに＞

聖公会生野センターで働きはじめた頃、よくこういわれた。「聖公会というところは何となくむにゃむにゃとすすんで行くところだ」と。聖公会の信徒でない私にとって聖公会で働くことは少なからず緊張感がありつつ、かつ一つ一つのことを論議し、決定してすすめていきたいと願っていた。もちろん聖公会生野センターの運営委員会がありそこで決定していくが、いざ『聖公会』となると何となくすぎていくことが多くあるように感じる。これは聖公会が「家族的であること」とも関係しているかもしれない。

1997年10月９日から11日まで YMCA 六甲研修センターで実施された大阪教区宣教協議会は私にとって意義深い３日間であった。「聖公会で論議ができる。」しかも対立しているかのようなテーマである。聖公会生野センターで働く私はこの宣教協議会に向けて大きな力を割いてきた。それは聖公会生野センターにとってこの宣教協議会は非常に大切であると判断したからである。

日本の教会が100年以上の歴史を経て真に「宣教」ということが語られてきたのか？という問いが私の中にはあった。もちろん教界の指導者レベルでは数多くされてきたが、今回の宣教協議会のようにより大衆的にしかも大阪という限られた地域を対象にして行われたのは非常に印象的である。つまり宣教の主体は聖職者だけでなく一人一人のキリストに繋がる者たちであることが強調されたのではないだろうか。それが実に見事に表されたのが閉会礼拝の「平和の挨拶」であった。そこでは誰もが共に固く握手をし、「共に担っていく」決意がなされたと感じたのは私だけではないだろう。ではなぜ私(たち)がこの感動を覚え、共有できたのか、少しそれを考えてみたいと思う。

＜語りだした人たち＞

２日目の朝、私は約100人参加の中で在日同胞(韓国籍と日本籍)が７人参加していることに気づいた。しかもその７人全てが「私は在日です」と、自ら述べていたのである。日本の宗教界で、一部の民族宗教や在日韓国人教会を除いてこのようなことはかつてあっただろうか。

「私は在日です」、この一言が言えずに長い年月苦しみ続けている友人がいた。この数年彼とは会っていないが、この協議会で彼を思いだした。彼がここにいたならば「私は在日です」、と言えるのではないかと。私の所属した分団では私のほかにもう一人の在日がいた。彼が自己を語りだしたとき必然的に分団の空気がピンと張りつめた気がした。淡々と自己を振り返り苦しかっただろう過去を語るとき、「その人はとても優しい人だ」とこの時、感じた。

分団を通して大阪教区では「在日」がタブーでなくなり、同情されずに、それが一人の人間として認められる教会の共同体に発展していくことを願いつつ、聖公会生野センターがそのミッション（使命）の一翼を担う存在でありたいと心が引き締められた。

私の属する分団の司会は女性であった。これまではたいてい男性がリードして進められてきたが今回は女性が前に立ち、会を進めている場面を少なからず発見した。未だにいわれる「女性は感情的になりやすい」「女性は女性のたまものがある、からそれを活かせばよい」という男の発想は今回、実感として否定できたのではないだろうか。男性中心社会の中で21世紀を目前にした今、確実に男女共働社会の素晴らしさを、女性の姿を通して見た私たち男性は豊かにされる喜びがないだろうか。最終日に全体の場で、女性聖職の話が出た。これはまさに管区総会などで論議されてきた「政治」の課題が一人一人の課題として深められている証左であると思う。

＜歴史を見据えて＞

今回の宣教協議会の大きな論議の柱は「歴史」であった。「教科書に載っている歴史」でなく、「聖公会と天皇制」「大阪教区の朝鮮人伝道」の歴史が学びの資料と共に提示され、私たちが見過ごしてきた歴史に真正面から向き合うことが全体で確認されたのは素晴らしい事だが、同時に大きな宿題が残された。しかしこれまではその宿題を宿題とも自覚せず過ごしてきたのではないだろうか。

歴史といっても様々な歴史がある。パネルディスカッションで語られたのは、在日の歴史であり、障害者の歴史であり、女性の歴史であった。それらはすべて今を生きている歴史であるがゆえに人を揺り動かす力があるのである。

もう一つ、これまで「語ってはならない」と思いこんでいた歴史を見据えようとする営みがこの協議会でなされたのでないだろうか。

＜弱くされた者が…＞

聖公会生野センターの働きはいかなるものですか？としばしば訊ねられる。その時私はこう応える。「弱いものが中心に据えられる社会を創造するための働きと願っております。」口で言うとたやすいが実践するのはたやすいことではない。教会がセンターを作ると、よく陥りやすいのが「教会のための、教会が安心できる奉仕活動」ではないだろうか。カトリック教会の宣教論議に「種まき」と「刈り入れ」があるが、聖公会生野センターは「刈り入れ」の宣教を目指したい。それはこの世で豊かに実っている神の宣教の業を私たちは刈り入れることであろう。

誤解を招くのを恐れずにいうと「今、教会が必要とされているのでなく、教会が神の宣教を必要としているのかもしれない」。これはどういうことだろうか。簡単かもしれない。「今、教会に何が必要か」を探すことからはじまるのではないだろうか。それへのヒントは大阪教区の宣教協議会にちりばめられているだろう。それは「女性の語り」であり、「障害者の訴え」であり、「在日の叫び」ではないだろうか。これまで「強いものが中心に据えられてきた教会」から「弱くされている者たちが主人公になる教会」「そして全ての者が互いを尊重されて活き活きとする教会」へと変革していくことではないだろうか。

身体に障害を持つ鍋島司祭の発言が印象に残る。「問題がないというところに問題がある。」

＜明日に向かって＞

宣教協議会の準備から論議になってきたのが「歴史を振り返るのも大切だが、宣教方策を論議しよう」であった。その解答はまだないかもしれない。しかし２泊３日の論議の中でその幻は浮かんできたのではないだろうか。教会に人を集めんとするならば、私たちが出かけて行かねばならない。これまで周辺に追いやられて、扱いが「お客さん」だった人たちが中心に据えられて共に教会を担わねばならない。

協議会終了近くになり各教会で祈りが捧げられた。その祈りには「『弱くされた者』を顧みる心と力をお与え下さい」(石橋聖トマス教会)、「復元された礼拝堂が主のみ栄えをあらわし、地域社会に開かれ仕えるものとならせて下さい。」(川口基督教会)、「教会と私達ひとりひとりが『共に生きる』部分に欠けていたことを反省し…地域の人々に仕えることが出来る勇気と忍耐…」(堺聖テモテ教会)、「これまでの教会の歩みを正しく振り返り…」(高槻聖マリヤ教会）……。と多くの教会で小さくされたものを顧みてこなかった懺悔と共に、今後の力強い「共に生きる決意」が捧げられたのである。

＜最後に・弱き者として＞

様々な観点から準備され論議された宣教協議会だが、多くの宿題が明らかになった今、これを具体的に推進していくことが求められている。宣教のあり方を巡る論議が宣教（ミッション・使命）として実践される時、聖公会のみならずキリスト教会そして教会の枠を越えた働きと繋がっていくと思う。

まず、「学びの資料」を再び振り返ることが求められるであろう。様々な観点から編集されたこれらの資料はこれまでの振り返りだけでなく、明日へのヒントが含まれている。まさに温故知新の宝庫である。そして顔と顔の見える関係で過ごした２泊３日の成果を各教会でより深められることであろう。

求められることはこれまで顧みなかったことや「お客さん」・「かわいそうな同情される人」として扱われてきた「弱くされれてきた人々」の声を腹の底から聴くことであろう。大阪教区の宣教（ミッション・使命）の歩みが豊かに展開されることを願ってやまない。「在日・障害者・女性・子ども」その全てが重荷を背負っている現実があると共に、小さなものにこだわることが、大阪からアジア、そして世界・地球的な視座を私たちに提示してくれるだろう。

聖書研究で述べられた「弱き自己を認識する」、ことはまさに私達が一人で立っているのでなく、耳を傾け、目を澄まし、そして全身で感じることではないだろうか。

「宣教において相互依存・相互責任」の関係を結んでいく、このことの素晴らしさが課せられた宿題をおこなっていく原動力になることを願いつつ…。

（お　くあんひょん　聖公会生野センター主事）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

○後援会費
年額　1口　3,000円（個人）
　　1口　10,000円（団体）

・郵便振込
００９６０－０－１３３４２９
「聖公会生野センター後援会」

□クリスマス献金・自由献金もよろしくお願いします
・郵便振込
００９１０－１－３２１７８０
「聖公会生野センター」

・銀行振込
三和銀行　東大阪支店
普通預金　３７１１３１１
「聖公会生野センター」

余　韻

■あっという間の１年だろうか？年々１年が早くなる感じだ。秋は在日のお祭りイベントが目白押し。（何も在日だけじゃないけれど…）以前はほとんど見に行ったり、参加したものだが、ここ１，２年はほとんど行っていない。理由は忙しすぎるからだ。「遊び心を持って」と、常日頃たれている割には自分は……情けない。その代わりじゃないけれど今年は例年になく映画をよく観た。特にオーストラリア映画の「ハーモニー」は今年の一押しだ。機会があればぜひ観てくださいね。（光）

■遠中近用のレンズを使うようになった。それまで３つのめがねを使い分けていたのが１つですむ喜びを味わっています。「根」のところで自分を１つにしたいと右往左往している私にとって、自分を１つにできる「便利なレンズ」が「教会に繋がること」であればいいなと思う。とはいっても、そんな「便利なレンズ」はどらえもんのポケットにしかないのかな？（ハミー）

■この秋、六甲山の山頂近くで、二泊三日の集まりに参加し、「隣人とは」を話し合った翌朝、自然の中をひとり散策した。薄靄（もや）の中に、大きな木も小さな木も、空に向かって手を広げ、仲良く立っていた。目を閉じて、朝露に濡れた木にそっと触れたら、枝や葉がサラサラと音をたてた。「隣人とは、観念的な存在とは違うんや。触れ合う人、応答し合う人、具体的な存在。ホラ、あの人、この人のことなんや」と言ってるみたいだった。（大）

■1997年夏、もしかしたら今まで一番いろんなことを考えたかもしれない。なにせ高槻地下倉庫（タチソ）、松代、どんづるぼうと、３つも地下壕に行ったのだから。1944年から1945年８月15日までに主に朝鮮人によって掘られたトンネル。52年前に掘られた穴の中で、「あの時はしかたなかった」、「自虐史」、なんて言葉が闇の中に消えていった……。（恵）

■最近、祈りとは、「あることを意識すること」ではないかと思う。宣教協議会で、様々な協議を行ったり、議論をまとめたり、共有点を探ったり、提案をしたり。そうすることは自分の心により深く、戦時のクリスチャンの思いを、小さくされた人の痛みを、意識することになる。そして意識し続けることが、行いを、結果を生み出す。自分が願ったとき、働きかけたときでないときかもしれないが、それは成就する。風が吹かないのに枯れ葉が落ちるように。編集担当の、鈴木恵一君が、現在、韓国に短期研修中。余韻もお休み。11月中には、帰国予定。韓国語で悪戦苦闘中とのこと。苦労話、土産話を請うご期待。（テモテ）

ちょっとひと息③

잔칫집에는　같이　가지　못　하겠다

お祝いの家には一緒に行けない。

他人の欠点をよく話す人はお祝いの家で、多くの人がいるところに行くと、自分の間違いをいろんな人の前で話してしまうので、一緒に行けないと言う意味。

発行所：聖公会生野センター
〒544 大阪市生野区小路東１-17-28
TEL 06-754-4356／FAX 06-754-4357
e-mail cyj02040@niftyserve. or. jp
発行人：木　村　幸　夫
編集人：大　橋　　襄